



未明肖像画：柳 敬助(1881～1923) / 『彼らの行く方へ』(聴文館、1923年)

# 館

小川未明  
文学館

# 報

創刊号

2007年  
5月25日

- 杉みき子 未明と海…………… 2
- 小埜裕二 文学史の中の小川未明…… 4
- 栗原 敦 これからの地域の文学館… 6
- 収蔵品紹介…………… 8
- 平成18年度特別展「御風と未明」報告……10
- 平成18年度小川未明文学館の一年……………12
- 小川未明文学賞……………13
- 未明ボランティアネットワークだより「のぼら」……14
- 平成19年度文学館カレンダー……………16



児童文学作家  
未明ボランティアネットワーク顧問

## 杉 みき子



## 未明と海

子どものころ、家にあつた文学全集の「小川未明集」には、小説と童話の間に、埋め草のように数編の随筆が載っていて、私はそれを童話以上に愛読した。ことに「少年の見る人生如何」「田舎の秋、高山の秋」などには、高田周辺 naturally の風物や、それが自分の心に終生どんな影響を及ぼしつづけたかということがこまかく書かれていて、ふかい共感をおぼえたからである。もとよりそうした親近感、童話からも受けていたのだけれど、童話は（おはなし）、随筆は

（ほんとのこと）と、子どもなりに区別していたので、それらの随筆がいつそう身近に感じられたのだろう。

ことに「田舎の秋、高山の秋」では、秋がしだいに深まるころのくびき野の風物が鮮かに描かれており、その中の（日本海の波の音が、これから夜々、耳につくのでした）という一節が、いつまでも心に残った。

私の子どものころといえば昭和のはじめだが、そのころはすでに、自分の家で波の音を聞いたという記憶はない。しかし、おなじ高田寺町にずっと住んでいた母や祖母の若いころは、冬近い夜になると、直江津の海の波の音が、たしかに聞こえたという。その話を聞くたびに、なぜか身ふるいするほどなつかしかった。今でも冬が近くなると、静かな夜には遠い波の音が聞こえるような気がする。少年時代の未明は、その波の音を、幸町の家で聞いたのか、それとも春日山上で聞いたのだろうか。その両方だったかもしれない。そしてまた、心の中では、一生聞いていたのかもしれないと思う。

数ある未明の文学碑の文言の中で、私がいちばん好きなのは、春日小学校の碑に刻まれた詩である。

雪やみて 木は熟し

鳥飛んで 海とおく鳴れり

春日山上からの眺めではないかと思うが、降りつづいていた雪がいつとき止んで、しんと静まりかえった水墨画のような世界に、とつぜん飛び立つ鳥、枝からこぼれる雪、遠い海鳴りが実に利いていて、越後の冬の壮麗な世界にひきこまれる思いがする。

未明の作品には、海の出でくるもののがかなり多い。童話を書きはじめたごく初期の作に「海の少年」があり、これをも含んで、日本



最初の創作童話集といわれる『赤い船』の中の同題の作品も、遠い海にあらがれる少女の心を描いたもの。そのほか、いま思いつくだけでも、代表作の「赤いろうそくと人魚」をはじめ、「黒い人と赤いそり」「月とあざらし」「黒い旗物語」「港に着いた黒んぼ」など、続々と海が出てくる。小説でも、新進作家として認められる契機となった『巖に葉』の主人公の少年は、授業中、先生に聞いた話から、遠い太平洋とその向こうの見知らぬ国々にあこがれる。

未明は幼いころ、あまりにきかん坊だったため、米山薬師へカンの虫の薬をもらいに連れてゆかれた。母と共に人力車に乗って行ったのだが、途中、海辺に出たところで、浜へ降りてひと休みした。幼い未明は大よろこびで、貝を拾い、波とたわむれ、いつまでも人力車に戻ろうとしないで母を困らせたという。ありふれたともいえる体験ではあるが、彼の海への関心の深さには、そのような記憶もいくらかはかかわっているだろうか。

未明のテーマの一つでもある〈あこがれ〉という気持ちは、つねに遠いものに向けられる。海の出でくる未明作品の中でも、さきに挙げたような、海そのものを舞台にしたものより、海が遠くにちらと見える、あるいは話の中に出てくる、そうした場合の方が、より強い印象を受けるような気がする。

「雪やみて 木は黙し……」の詩碑もそうだが、中郷小学校の詩碑「夏が来るたび 雲に風に……」の最後の二行。

かゝやく海を香かに望む

あゝうるはしきかな ふる里よ

この詩の海からも無限の想像がひらける。童話でいうなら、「大きなかに」のおじいさんは、海への町へ用た

しに行つた帰り、浜で焚火をしているふしぎな男たちから、身のなにかにをもらい、それをきつかけに、静かな老いと死の世界へ歩み出す。男たちは、海のむこうから来た異界のものだったのか。

また、「山の上の木と雲の話」のさびしい木に、あこがれの雲の女王の消息を聞かれた旅のつくみは、はるかな海のむこうの美しい町の空に浮かんでいるその雲を見た、と話す。この〈海のむこう〉の印象は強烈で、私は今も金谷山へ登るたび、遠い日本のむこうに、その美しい町のまぼろしを見る。

幼いころ、帰るのを忘れて海と遊び、多くの作品に飽かず海の魅惑を描きつづけた未明の、自ら書き残した墓碑銘のような一章。春日山神社境内の〈父母の霊碑〉の裏面に刻まれた詩句である。

故山 長へに父母を埋め

わが詩魂 日本海の波とならん



春日小学校にある未明の詩碑「雪やみて」

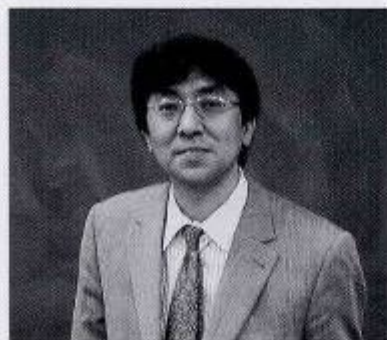
文学作品の〈価値〉をどこに置くかといった規準は、時代に  
よって異なる。近代以降は、社会体制の持続をねがう読者層の  
支持によって、文学作品がもつ美的機能を〈価値〉の中心に据  
えることが多くなつた。プロレタリア文学が、文学史において  
傍流的な位置づけをされるのはそのためでもある。逆に、い  
くらか偏向した考えが作品中に見られても、その考え自体が文  
学の〈価値〉として問題視されることは少なく、作品がしっか  
りした構成をもち、文学作品としての仕掛けが豊富で、読み解  
く醍醐味を読者に与えてくれる作品であれば〈価値〉があると  
みなされてきた。文学史は、そうした〈価値〉を規準に編まれ  
ている。とすれば、「文学史の中の小川未明」を考えようとする  
ときは、いったん今ある文学史を棚上げした方がよい。文学作  
品の〈価値〉とは何かをあらためて考えながら、未明文学をそ  
の〈価値〉との関係で捉え、新たな文学史の中に位置づけてみ  
るべきだろう。既成の〈価値〉でしか、われわれは未明文学を  
捉えていけないのかも知れないのだ。

文学の〈価値〉には、このところ変化が見られる。少なくとも  
も文学研究の世界では、文学テキストを唯一の研究材料として  
子細に読み解く方向から、テキストが社会とどのように関わり  
社会にどのような影響を与えているのか、そういった文学の社  
会的機能を重視する方向に変わってきた。かりに文学の〈価値〉  
を美的機能と社会的機能の和であると考えらるなら、未明文学は  
どのように捉えられるだろう。未明の文体には、賢治童話がも  
つような言葉の一つ一つに生彩がない、常体と敬体が混在して  
いて始末がわるい、文章の陳述関係に乱れがあるといった批判  
の声を聞くことが多いが、そのことにはばかり目くじらを立てて  
いてよいのだろうか。未明の混沌とした文学世界が重視される

## 文学史の中の 小川未明

上越教育大学教授

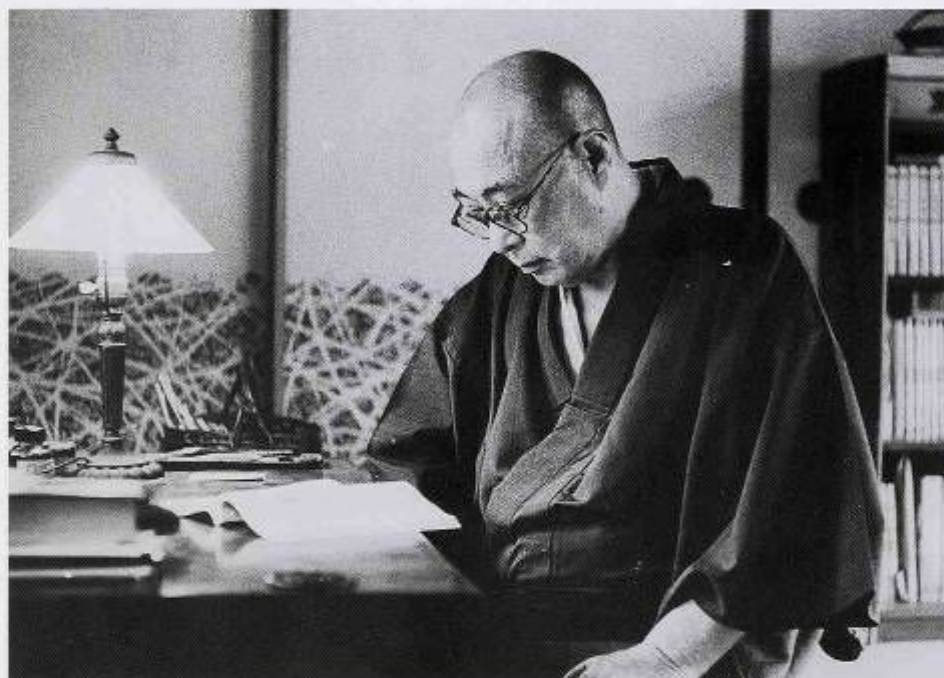
小椋 裕二



時代がきている。前のめりになりながら言葉を発し、時代に即  
応しながら〈人間性〉を疎外するものと闘ってきた未明文学が  
必要とされる時代がきている。

未明文学に向かうとき、われわれは、文学の〈価値〉や文学  
史の常識以外にも、いくつかの先入観を払わなければならない。  
今われわれが知る戦後の児童文学は、周知のように未明童話を  
否定するところから始まった。戦後の民主主義は逆境を乗り越  
え、未来を切り開く向日性を好んだ。生きることに向ききな子  
供が児童文学の子供像の主流になり、ハッピーエンドが好まれ  
た。明るい子供像の反対側の極を指向するものとして押しや  
られたのが、未明童話である。しかし死に惹かれる子供は、好ま  
しくないのか。未明は、子供を半人前と捉えて教導した明治時





読書中の未明。昭和28年頃

代のお伽話に対し、子供を大人が見習うべき存在と考えた。ワーズワースの「子供は大人の父」という意味で童話を書いた最初の人であった。ヘルブレスな子供の姿、死に惹かれる子供の姿は、社会化されて大人になった人間が見ようとはしなくなった、人間の自然の姿を見据えたものである。未明童話は、大人が失った大事なものを子供の姿を通して大人に思い出させようとした。子供には明るい面もあるが、暗い面もある。われわれは戦後の子供観を規準に、未明童話を捉えるべきではない。子供のころ、われわれはどのような物語を読んでも楽しかった。大人の読み方と子供の読み方は違う。童話を、まとまりをもって読もうとする大人に対し、子供はイメージを大事にする。あちらこちらの場面が面白い。大人は童話のストーリーラインを理解するために主人公を中心に読むが、子供は主人公の一生よりも、遊んだ、笑ったといった述語を中心に読む。また子供はこわい話が好きである。とくに現代を生きる子供は、底知れぬ不安を社会に対して抱えていて、その不安に言葉を与えたいと思っている。おそろしい、かなしい、残酷なものこそ古来、昔話の特質であり、そこに子供は現実世界を生きていくための糧を見出していたが、大人はそれを悪しきものとして子供から取り上げようとする。未明童話はグリムが集めた昔話に似たところがある。われわれは大人の読書観を規準に、未明童話を捉えるべきではない。

未明は現象や存在の本質を鋭く見抜くことのできる作家であったし、本質を巧みに形象化、構造化することのできる作家であった。未明童話を大きな文学史の流れで捉えるなら、神話や昔話、伝説の流れを汲むものとして、力強い命脈を保っていることが知られるはずである。



## これからの地域の文学館

小川未明文学館専門指導員  
実践女子大学文学部教授

栗原 敦

私たちの生せいには二つの夢があつて、ひとつは、現実の世界での、もうひとつは見えない世界でのことです——、そして、この二つは両方ともなくなつてはかなわぬものなのだ、いま私は考えようとしています。

たとえば、その中にいると気づかないようなもの。戦災や震災のような不幸のあと、急ぎ間に合わせるのだから仕方ないと、考えなしにそれまでとは全く断絶した復興が成されたとき、はじめて本当に失われたと気づかされるような何かです。

私たちの日々の暮らしと働き、つまりは生活ですが、環境とライフスタイルのない交ぜになつたもの、ひとりひとりや家族や近隣と支え合つたり折れ合つたりして、溶け合つてつくられていたもの、形が伴えば生け垣や、路地のたたずまいや、家並みや、町並みやでしょうし、よくいう政策や行政の背後に置かれるコミュニティーと呼ばれるようなものかも知れません。た

だ、私が文芸の研究に携わつてきたことから、それらよりさらにぼんやりしていてあいまいだけれど、よりいつそう微妙で奥深いものもそこに含めて考えたいのです。

喪われたものとしての話題では、昨年亡くなられた茨木のり子さんの遺稿詩集『歳月』が最近刊行されました（花神社、07・2）。これは、早くに亡くされた夫君に対する思いを記した三十一一年間の作品を集めたもの。生きていた間は照れくさいから出さないといつて秘められていたそうですが、これらの詩群を見れば、それぞれの表現のときどきにおいて、亡くなられた夫君は茨木さんにとつていなくなつてはいないのだということがよくわかります。実在しないものがあるように思うのは夢をみているのと同じでしょうが、決して嘘でも偽りでもなく、実在以上に真実であり、事実であるといつて少しも差し支えありません。



そうであれば、これは過去についてだけでなく、これから、未来のことについても言えるのだと、納得して頂けるのではないのでしょうか。いまここにあつて、しかし気づかれにくいために夢のようにしか捉えられないもの、いまここにはないが、夢として真実であるもの——いまの子供たちが、大きくなったあとであそこには何かがあつたと振り返ることができるようなものを生み、育み、保ち続けたい、これが「地域の文学館」のつとめではないでしょうか。

東京で文学者としての仕事を開始して以降、故郷に帰り住むことのなかった小川未明ですが、その作品には彼が生い立った時代の故郷の、地域の空気、気配、雰囲気や歴史的刻印として刻み込まれています。説明しようと思うとちよつと難しいのですが、お読みになつた方ならどなたでもすぐ感じ取つていただけるでしょう。これらは、私たちの日々の絶えざる営みと願ひによって紡ぎ上げられているものですから、時代と状況との関わりで、ゆるやかに変化して、止まることはありません。しかし、未明の残した表現を通じて、未明の時代の人々が受け継ぎ、作りあげ、維持していたであろうものを知ることが出来る私たちは幸いです。なぜなら、それを手がかりに、受け継がれてきたものを確かめ、そうすることによっていま現在ある気づかれにくい大切なものに気づき、未来への夢として自覚することが可能だからです。

「小川未明文学館」のつとめとして、もっと実務的で、実務的なことがらについても記すべきだつたかも知れませんが、ひとまずは、郷土の作家としての小川未明を通じて、私たちが学び、生かさなければならぬことについての、私の夢を書いてみました。



## 収蔵品紹介

### 真昼の湯屋

未明は湯に入るのが好きだった。正午、銭湯が開くのを待って初湯につかるのが日課であり、何よりの楽しみだったようである。

「ああもう正午だぞ。〇さんが手拭を下げて通られたから」町に住んでゐる時は、湯屋が開くのを待って、初湯に入ったもので、商家の顔を見知った者が、かういつてゐたさうであります。…

まだ誰も入らない、あたりが白く乾いてゐて、僅かに湯船から立ち上る湯気をはかなみ

今回は、未明直筆の原稿と書簡から、未明の空想の源泉の一つであった「湯」に関する資料を紹介します

つゝ、独り湯に浸って、自然に湧き来る空想を楽しむのであります。

(小川未明「湯屋」)

真昼の白い光が差し込む中、乾いた銭湯の床を踏み、湯船へ向かう未明の姿が思い浮かぶ。ひかえめに立ちのぼってくる湯気を見ながら、未明は自然と湧き起こってくる空想にふけた。

原稿「湯屋」で、未明は、自らの湯好き、銭湯通いについて語っている。そして幼い頃母に連れられ行った町の湯屋の情景を鮮やかに思い出す。

### 母に連れられて

未明の母も湯が好きで、長湯であったという。幼い頃、母に連れられて行った町の銭湯は、「豆ランプが頭の上にともつて、ちらちらと光り湯をうつしてゐた」。

脱衣場の壁には、商店の廣告や寄席のピラが下がってゐて、吹き込む西風にさらさらゆれてゐました。私は、女湯へ旅藝人が入って、詠言葉で話すのを哀しさと憧れの心をもってきいたものです。

(小川未明「湯屋」)

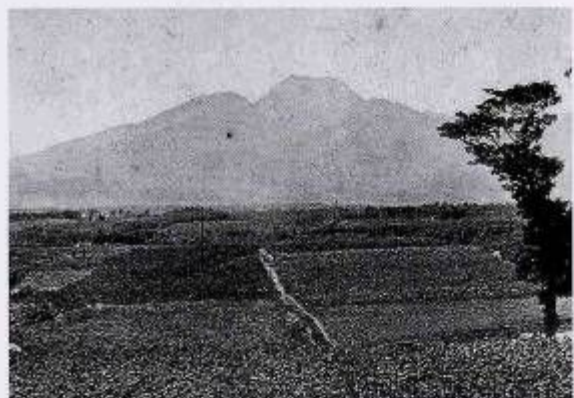
明治26年、未明は母と一緒に妙高山麓の燕温泉へ行っている。改造社版『現代日本文学全集23巻』の自筆年譜には、「母に連れられて、燕温泉に行ったのは、この年と記憶する。浴客等は、いまだ行燈の下で将棋をさしていた。」と記されている。

燕温泉は、明治8年に開かれ、妙高山系の温泉の中で最も高位位置にある風光明媚な温泉である。この頃、燕温泉までの道のりは、信越本線の関山駅から馬に乗って山道を登っていき、途中、関温泉を通った。時代は下がるが、昭和8年発行の『新潟県温泉誌』に、「関温泉から曲がりくねった坂道を登って行くこと約二軒やがて湯川の溪に出る、そこから燕温泉を振仰ぐと恰も削り落としたやうな断崖

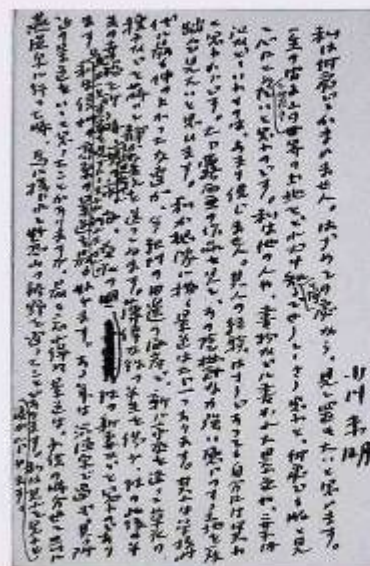




小川未明原稿「湯屋」(用紙3枚)



妙高山の遠景「新潟県発展写真号」大正4年



細田源吉宛小川未明葉書

大正10年6月20日

の上に危く建つてゐる。二層樓の旅舎が見えるまるで南画そのまゝの景色である。」と書かれており、未明の小説「麗日」に出てくる「鷺温泉」の景色と重なる。

しらかんばの樹が風に枝を鳴らしてゐる山の鼻を曲と、溪を隔て、温泉場が見えた白水の奔流する千仞の溪川を裏手に見落して、崖の上に危ふく二階屋が急阪を挟んで二列に建つてゐる。

(小川未明「麗日」)

町の銭湯と燕温泉、湯好きの母に連れられ

て行った子供時代の懐かしい思い出が、温かい湯に入ると、未明の胸中にふつふつと湧き出てきた。

### 忘れ得ぬ景色

最も忘れ得ぬ景色は、子供時分母と燕温泉に行った時、馬に揺られて妙高山の裾野を通ったこととあります。私は其れを思ふと涙がにじみます。

(細田源吉宛小川未明葉書)

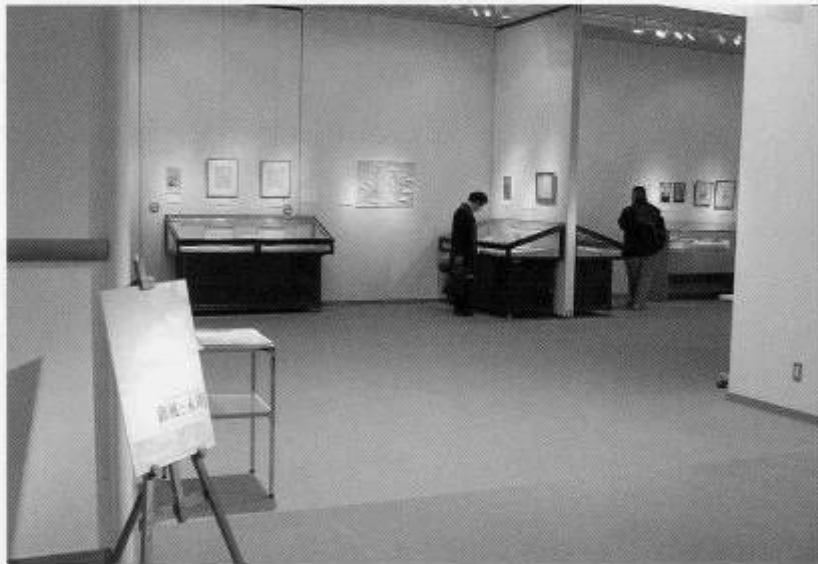
春陽堂編集部にいた細田源吉宛の書簡では、

「私は何処でもかまひません。はちめての処なら、見て置きたいと思ひます。」とはじまり、どこか旅する土地についての話だろうか。

「陰鬱」で「力強い感じのする」ロシアの大地、学校時代の友人が静かな生活を送る紀州の海岸、信州の高原の景色への憧れが途切れることなく書かれる。最後に、燕温泉へ行った時に登った妙高山麓の景色が浮かびあがる。

未明は、白昼の湯屋で静かに空想にふけり、思い出の景色や憧れの世界を幾たびも追憶した。この時、鮮やかにわきおこる色や音、感激を原稿用紙に描いていたのかもしれない。

# 「御風と未明」報告



平成18年10月1日、小川未明文学館は開館一周を迎えました。これに際し、ともに上越地方に生まれ、およそ50年にわたり友情を育んだ相馬御風と小川未明の交流をテーマに特別展「御風と未明」を開催しました。

## ■ 展示概要

糸魚川出身で詩人・評論家・良寛研究家として知られる相馬御風と小説家・童話作家小川未明は、ともに上越地方に生まれ、高田中学(現、新潟県立高田高等学校)、早稲田大学と同じ学舎で過ごしました。御風は、未明の人柄をよく理解し、そこから生まれる特異な作風に共感を寄せ、未明が小説家として地歩を固めるきっかけを作ったといえます。文壇稀に見る美しい友情と言われた互いへの理解と共感の源を75点の展示資料によって紹介しました。

## 第1章 文学の土壌 高田中学時代

小川健作(未明)と相馬昌治(御風)は、一つ違いで、健作は明治28年(1895)、昌治は、明治29年に中頸城尋常中学校へ入学する。高田中学での恩師、友人たちとの出会いを背景とし、二人の文学を形成していく土壌が育まれていった。健作は、同校の教師から漢詩の手ほどきを受け、自作の漢詩や小文を友人に宛て送ったり、雑誌「中学世界」に投稿するなど、創作活動に熱中していく。一方の昌治も、短歌と出会い、佐々木信綱主宰の短歌結社竹柏会に入会している。二人は、同じ高田中学の文芸部に所属し、文芸部発行の雑誌の編集にも携わっていた。



## 第2章

### 早稲田の懐 早稲田大学と二人

同じ早稲田大学に進んだ二人は、坪内逍遙、島村抱月という共通の師、友人らとの出会いに恵まれ、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）からは英文学の講義を受け、その神秘的な文章と人柄に影響を受けた。

卒業後、御風は第二次「早稲田文学」の編集に携わる。自然主義隆盛の文壇で、孤立煩悶していた未明を救ったのが、御風が発表した「小川未明論」であった。友人として温かい理解に満ちた作家論であり、未明の文学を「内部生命」の叫びとして捉え、その全体像をいち早く要約している。

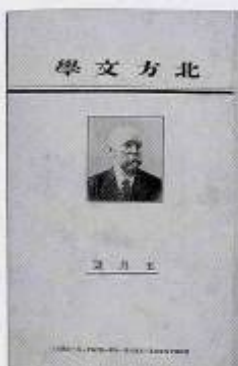


相馬昌治高田中学時代の日記【糸魚川歴史民俗資料館所蔵】  
明治33年1月27日、学校で小川健作（未明）が演説したことが記されている

## 第3章

### 「北方」二人の重なり

明治45年（1912）5月、未明主幹の雑誌「北方文学」が創刊される。「北方文学」は、北方ロシアへの憧れと未明の郷里である北国の風土色が混在していた。これに対し御風は、共感を寄せ、毎号詩や評論を寄稿し、協力を惜しまなかった。高田中学の後輩で、早稲田大学の学生であった村松苦行林と松岡白虹も編集に携わっており、この二人は、後に上越の文壇で活躍する。



「北方文学」創刊号  
明治45年5月号  
【上越市立図書館所蔵】

## 第4章

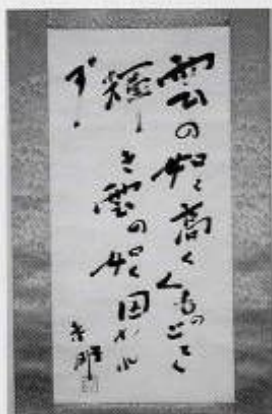
### 御風帰住後の交流

大正5年（1916）、御風は『還元録』を著し、郷里糸魚川へ帰住する。静かな環境の中で、故郷の自然に力づけられながら、歌を作り、良寛研究に没頭していった。御風と未明の間に交わされた手紙には、折にふれて著書を贈り合い、互いの健康を気遣い、思いやる様子が表れている。



御風書軸「大空を」  
【糸魚川歴史民俗資料館所蔵】

大そらを  
静に  
しろき  
雲は行く  
しづかに  
われも  
生くべく  
ありけり  
御風



未明書軸「雲の如く」  
【小川家所蔵】

雲の如く高くくものごとく  
輝き雲の如く閃われ  
ず  
未明

二人の雲の詩には、高潔なたましいで理想と憧憬の世界に生きていく未明と寂寥の中で生を味わい、宗教的境地に生きる御風の姿が表れている。それぞれが思い描く雲の風景、人生態度は異なるが、二人の間には、故郷の自然を背景とした深い共感と理解があったのではないだろうか。

## 平成18年度 小川未明文学館の一年

4月

山福朱実画「砂漠の町とサフラン酒」原画展 4/1～4/23

9月

文学館講座 9/2・9/16・9/30

講師：小埜 裕二氏（上越教育大学教授）

第1回 「〈夏〉の童話を読む」

第2回 「〈姉妹〉の童話を読む」

第3回 「小川未明と宮沢賢治」



文学館講座

### 小川未明文学館開館1周年記念事業

10月

特別展「御風と未明」 9/30～11/12

特別展講演会

講師：金子善八郎氏（糸魚川歴史民俗資料館）

小川未明文学館図録「小川未明の世界」刊行

童話創作講座

講師：杉みき子氏（児童文学作家）

入門コース 10/8・10/29・11/12

実践コース 10/15・11/19



童話創作講座

11月

1周年記念講演会 11/5

講師：阿刀田高氏（小説家・直木賞作家）

演題：「小川未明への旅」



阿刀田氏講演

2月

小川未明と絵てがみ展 2/17～3/4

朗読研修会

講師：橋 由貴氏

（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）

第1回 2/17 「ここを癒す朗読法とは」

第2回 3/17 「声の基礎、発生の基礎」



絵てがみ展

3月



# 小川未明文学賞



第15回 贈呈式

日本児童文学の父と呼ばれる上越市出身の小川未明の文学精神を継承し、新しい児童文学作品の創造を目指して「小川未明文学賞」の作品を募集しています。

小川未明文学賞は平成3年に創設され、今年で16回目を迎えます。これまでに延べ7200編を超える作品が国内外から寄せられました。

贈呈式は、隔年ごとに東京と上越を会場に、毎年11月に開催しています。

また、大賞作は単行本で発行され、多くの子どもたちに読まれています。

## 作品募集

未明の文学精神「誠実な人間愛と正義感」を現代の子どもたちにつちかひ育むような鮮やかな児童文学作品をお待ちしています。

### ◆募集作品

・小学3～6年生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由  
・400字詰め原稿用紙で50枚～120枚

◆応募資格 年齢、プロ・アマを問いません

◆応募方法 上越市文化振興課へ郵送または持参してください

### ◆締切り

平成19年7月31日(火)(当日消印有効)

### ◆入選作

大賞1作(ブロンズ像、賞金100万円、副賞)

優秀賞2作(賞金20万円、副賞)

### ◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、11月下旬に本人に直接通知します

### 応募・問い合わせ先

T 943-8601

新潟県上越市木田1-1-3

上越市文化振興課「小川未明文学賞係」

TEL: 025-526-5111

FAX: 025-526-6113

Email: mme@civj.coetsu.jp

## \*受賞のひとこと\*

小川未明文学賞大賞を受賞して、私の人生は一変しました。連絡をいただいた時のことを、一生忘れません。

私の夢は「一生のうちに単著で一冊本を出版すること」だったのですが、こんなにも早く夢が叶うとは思いませんでした。

小川未明……児童文学界の偉大な作家の名前を冠した賞をいただけたことを誇りにして、読んだ人が「明日が来るのが楽しみだな」と思えるような、そんな作品を書いていたらと思っていました。

夢はみるだけではもったいない。ぜひ、叶えるための一歩をふみだしてみてください。

第15回 小川未明文学賞大賞受賞

宮下 恵菜 (本名: 山下三恵)





## 地域活動

## 参加者の声

牧区公民館主催の「ガキ大将道場」の小学生と、地域の高齢者の方々と交流会にて、上越市が誇る郷土の偉人「小川未明」を知ってもらおうと計画。ボランティアの皆さんの素晴らしい語り、音楽、演出により、未明の世界に引き込まれました。

牧区



## 学校へ出張おはなし会

春日小

未明ゆかりの地である春日小学校では「未明をしらべることを通して郷土の様子を知ろう」と出張おはなし会を計画。子ども達が未明の童話からふるさととの自然や人々を大切にすることを学ぶ良い機会となりました。その後、子ども祭りで「郷土の先輩 小川未明ミニミニ博物館」を開き、手作り紙芝居や朗読劇を披露するなど、地域の人たちに学習の成果を発表しました。

飯小

飯小では、総合的な学習で「ふるさと上越、飯に生きる方々のお話を聞く会」に取り組んでいます。「人から学び、自分について考える」学習として、今回は小川未明生誕の地を訪ねたりして未明に対する興味が一層高まってきている子ども達に未明作品を読んでいただきました。これを通し、未明作品への興味、読みたいという意欲につながったことを実感しています。



## 子どもの声から...

小川未明って？その疑問が解消しました。今までは名前しか知らなかった未明。私が知ってびっくりしたのは、あだ名が「カキ大将」なんですね。いろいろな話を聞いた未明の素は、実は？それだけで100冊以上の本をかいた。という事で、あまりに多いのびっくりでした。私も次の方から言葉の大切さを学びました。伝えたい事・命をもつ言葉・命の大切さ。さあ言葉。私は言葉に気をつけて生活し始める話を聞きたいです。6年2組

「牛車」の話はとても長い話でした。牛車はやさしい心を持つ大きなママが死んでから子供のことを思うママは本当に母親の本心だと思います。今は母親が子を殺してしまうこともある人々の時代や現代の人間の話を聞かされたらいいと思います。私が学んだことは未明さんらしくしようです。今の牛車のように現代の小川さんの作品を大人ごころにして、命を大切にすることをよく知りたいと思いました。お楽しみでした。6年2組

**編集後記** 私達の活動を通し、「もっと小川未明を知りたい」「未明童話の世界に浸りたい」と望む人々の声が徐々に聞かれるようになり大変うれしく思います。さらに、その輪が広がることを願い、楽しみながら活動を続けていきます。(未明ボランティアネットワーク広報担当)

出張おはなし会、会員加入の連絡先

上越市企画・地域振興部 文化振興課  
〒943-8601 新潟県上越市木田1-1-3  
TEL025-526-5111 FAX025-526-6113  
E-mail:mimef@city.joetsu.lg.jp



# のぼり

未明ボランティアネットワーク活動

vol. 2

発行：未明ボランティアネットワーク

## ●未明ボランティアネットワークとは

「上越市出身の児童文学者である小川未明の顕彰活動をしよう」と、朗読ボランティア、未明童話の愛好者などが集まり、平成15年に会を発足しました。出張おはなし会や小川未明文学館でのイベントの企画から開催まで積極的に活動しています。

これらの活動を通し、故郷と自然と人間を愛し、作品を書き続けた小川未明の偉業を大勢の人や子どもたちに伝えていけたらと思います。

## 平成18年度 の 活動

- ▼小中学校へのおはなし会 16校 1,303人
- ▼地域活動へのおはなし会 3施設 117人
- ▼特別展への協力（こどものための朗読講座、手づくり絵本ワークショップ、おはなし会、展示監視）
- ▼小川未明文学館ビッグブックシアターでのおはなし会（毎月第2・第4日曜日、午後2時から）
- ▼会員研修（相馬御風記念館へ）

## 活動の 記録

### 小川未明文学館 1周年記念事業 こどものための朗読講座



♥未明作「赤いろうそくと人魚」の紙芝居を使い、発声方法、表現方法など基礎を学ぶこどもを対象とした朗読講座を開催。3回目は発表会を行いました。

#### 開催者の感想

参加者は発声練習の段階から大きな声が出ていて、非常に積極的でした。親子での参加も多く一緒に楽しみ、家庭でも親子で読み合ったとのこと、大きな意義がありました。

音読と目読との違い、多くの人たちの前で朗読することの楽しさを学んでいただけました。

# 案内



小川未明文学館図録

## 「小川未明の世界」

小川未明の文学と文学館を紹介した図録です。未明研究者や関係者からの寄稿文に加え、未明の郷土しょうえつマップ、略年譜なども収録されています。

頒布価格 1,000円(税込み)

頒布場所 小川未明文学館もしくは文化振興課

## 平成19年度 小川未明文学館カレンダー

- 6月 ●夏の夜の文学館講座  
製本教室3回(12・19・26日)
- 7月 ●小川未明文学賞締切り(31日)
- 8月
- 9月 ●童話創作講座(予定)  
●特別展「未明童話を彩る童画家たち  
—長岡出身の童画家川上四郎—」(仮)  
9月29日～10月28日
- 10月 ●同時開催  
こしだミカ/絵「太陽とかわず」原画展
- 童話挿絵教室 10月22日・11月11日
- 11月 ●企画展「未明の童話に惹かれた画家  
—吉田延原画展—」  
11月22日～12月9日
- 12月 ●小川未明文学賞贈呈式(11月22日)

\*上記講座の他に、文学館講座(日程未定)を開催。  
\*特別展のほかに、随時、新収蔵資料を紹介する小企画展を開催。  
\*毎月第2・4日曜日午後2時からおはなし会を開催。

## 小川未明文学館ご利用案内

### ●開館時間

火～金曜日：午前10時～午後7時

(6/1～9/30の間は午後8時まで)

土・日・休日：午前10時～午後6時

### ●休館日

毎週月曜日(ただしこの日が休日の場合はその翌日)

休日の翌日・毎週末日・12/29～翌年1/3・資料整理期間

### ●入館料…無料



### お問い合わせ 小川未明文学館

〒943-0835

新潟県上越市本城町8-30(高田図書館内)

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

E-mail [nimej@city.joetsu.niigata.jp](mailto:nimej@city.joetsu.niigata.jp)

URL <http://www.city.joetsu.niigata.jp/sisetu/ogawa-nimej/index.html>

発行：上越市・文化振興課

〒943-8601新潟県上越市木田1丁目1番3号 TEL025-526-5111